

2019年度 第6回観察会 記録

日 時	2019年9月9日（月）～11日（水） 2泊3日	
観察地	石川県能登半島（七尾市、珠洲市、輪島市）	
講 師	中村 浩二先生（金沢大学名誉教授、石川県立自然史資料館館長）	
テー マ	能登半島の里山里海	
備 考	参加者数：23名（講座生19名、中村先生、田中先生、スタッフ2名）	記録：藤原雄平

能登半島の最先端に位置する珠洲市は人口14,000人で、本州でもっとも人口の少ない市です。人口減少・少子高齢化は日本各地で共通の問題ですが、珠洲市を含む能登半島にとってもことさら深刻な問題です。金沢大学は廃校となった小学校校舎を珠洲市より借り受け、2006年に能登学舎としてオープンし、能登の里山里海活動を通じて地域おこしを担う若手人材の育成機関として「能登里山里海マイスター育成プログラム」を立ち上げました。今年度の第4回講演会で、5月25日に中村先生にマイスター育成プログラム、及び卒業生たちの活動状況について講演していただきました。今回の自然観察会は、能登で地域おこしに頑張っているマイスターOBの若者たちの活躍ぶりを見ること、及び指導者の方々からお話を聞きました。

<第1日目>

大阪駅8:45の集合時間に遅刻者なく集合。9:12発サンダーバードに乗車。田中先生はじめ京都からの合流者も無事に揃い、23名全員集合。金沢駅で中村先生に合流、めだか交通の中型貸切バスに乗車して、3日間の能登自然観察会バス旅行が始まった。

[のと里山里海ミュージアム]

最初に訪問したのは、昨年秋に開館した施設、「のと里山里海ミュージアム」。中村先生から事前連絡していただいたので、和田館長とスタッフの出迎えを受け、館内を案内していただく。施設のコンセプトは「能登立国1300年の暮らし（自然、歴史、文化）の価値を踏まえ、未来を創造する博物館」。老若世代を超えて交流できる施設であった。



[能登島交流会]

七尾湾に浮かぶ能登島は面積47km²の島で能登半島と2本の橋で結ばれている。マイスターOBの小山さんの待つ「おにゆりの里」に到着。教室に入り、小山さんが現在しておられる活動状況について話を聞く。



小山氏「地域での新しい働き方」のお話

小山さんはIターン者。地元に溶け込み田舎暮らしに満足しているようだが、生計面では厳しそう。現状一番の仕事は主にフランス人相手のレンターサイクル業とのことでした。向田の火祭りが行われる広場で説明を受けた後、鉢ヶ崎海水浴場に隣接する「まあそいカフェ」で、女店主の福島さんから能登島地域おこしの一環として能登島ブランドの商品開発に取り組んでいる話を、清酒製造工程で発生する米粉を使った「のとじまバトンケーキ」をいただきながら聞く。

[製塩工場見学]

続いて地元育ちの源内さんが営む製塩工場を見学した。海底に沸く湧水と混ざった海水から塩を作るうまい塩が取れるとのこと、森と海との関係を証明するような話であった。お土産に源内さんの塩を購入した人も多かった。

3人のマイスターOBの地域活性化に前向きに取り組む様子が良く理解できた。生計面は大丈夫かなと不安な思いもぬぐえなかつたが、彼らの事業が順調に発展することを祈りたい。



源内氏から製塩工程の説明

[梅屋旅館]

能登島内にある梅屋旅館に宿泊。夕食時に自己紹介をする。



梅屋丸の水揚げ風景

<第2日>

朝5時に旅館前に集合して、漁師の網元でもある梅屋旅館の所有船「梅屋丸」が定置網から収穫して来た魚類の水揚げの様子を見せてもらうため近くのエノメ漁港に移動。興味深く見せていただいたが、当日の漁獲量は少ないとのこと。水揚げされたイカがお造りとなって朝食に提供された。

[金沢大学能登学舎]

2時間ほどの時間をかけて、能登島から珠洲市にある金沢大学能登学舎に移動。建物は旧小泊小学校の校舎を利用したもの。伊藤浩二准教授に学舎内を案内していただきたい。マイスター育成プロジェクトの卒業生たちの顔写真や卒論テーマ等を記載したパネルが壁中に貼られていたのが印象的だった。校舎内を見学後次の説明があった。

- ① 伊藤浩二先生：金沢大学のマイスター育成プロジェクトについて。
- ② 加藤理事長：NPO法人能登半島おらっちや里山里海の活動状況。
- ③ 珠洲市職員・宇都宮氏：珠洲市の自然共生への取り組み状況。
- ④ 同・杉森氏：移住・定住への取り組み状況について

参加者から、若者たちへの市の支援を強化してもらうことを要望するなど、いくつかの意見交換を行った。



昼食は学生食堂を臨時に開いてもらい、地元のご婦人方が造ってくださった料理を美味しくいただいた。

[大野製炭工場]

マイスターOBの一人である大野長一郎さん（下写真）が経営する大野製炭工場を見学した。大野さんは能登半島で唯一人の炭焼き専業者で、能登の里山と生態系維持にも深い関心を持っている。

炭の原料にするクヌギを安定的に確保するには地元の理解と協力が必要と考え、地域住民や子供たちに参加してもらう植樹イベントを開催し、里山の大切さを訴えているとのこと。

炭は茶道で使用する菊炭に特化し、生き残りを図っているとのこと。懸命に頑張る姿勢がよく分かった。



[蛸島キリコ祭り]

今夜の宿舎「狼煙館」に向かう途中、9日～10日が祭日の蛸島キリコ祭りの「キリコ（御神灯）」を見ることが出来た。能登半島のあちこちでキリコ祭りが行われるが、なかでも蛸島のキリコは高さ6mと大きく、総漆塗り、金箔張りと豪華さが自慢。白塗りに派手な衣装の担ぎ手に引かれた13の輿が町内を巡行する。

めだか交通の干場社長の案内で間近から見学でき、記念写真を撮る。
夜、灯の入ったキリコを見たら感激はさらに増したと思われるが、祭りの会場は旅館から遠く、タクシー確保も難しいとのことであきらめざるを得なかった。

この後、奥能登の守護神、須須神に参詣。但し時間がなく、照葉樹林の北限を示すスダジイ等が覆う参道の入り口まで社殿までは行けなかった。当夜は能登半島最北端に位置する禄剛崎（狼煙）灯台が近い旅館狼煙館にて宿泊。



<第3日>

[禄剛崎（狼煙）灯台]

朝7時、全員旅館前に集合して禄剛崎（狼煙）灯台のある丘に登る。小振りの灯台だが、明治16年設置で、歴史的・文化財としての価値は大きく、「日本の灯台50選」に選ばれている。海の眺めは雄大そのものだった。



[上時国家]

8時半に宿を出発。能登半島の外浦の海岸沿いに輪島方面に向かう。まず立ち寄ったのは大庄屋を務めた豪農の住まい「上時国家」。時国家は平家一門の平時国を祖とする名家で現在の豪壮な建物は21代当主が1808年より30年近い年月をかけて築造したもので国の重要文化財。透かし彫りの欄間を含め調度品にも贅が凝らされていて驚きである。



〔白米千枚田〕

2011年に能登は世界農業遺産の認定を受け、白米町にある棚田・千枚田はそのシンボル的な存在になっている。海に面した斜面に千を超える棚田が並ぶ景観は見事だが、夜はライトアップするなど観光化も目立ち、一部の人からは厳しい意見もあった。ここを管理している白米千枚田愛耕会の堂前さんからオーナー制度を導入し運営していることなどの説明があった。



〔輪島塗・桐本木工所〕

木地作りから仕上げの漆の上塗りまですべての工程を一貫して行っている輪島市内の桐本木工所を見学。関西から嫁いできたという社長夫人から製造過程を紙芝居や現物を利用して丁寧に解説していただく。工程の中で輪島漆器の特徴は上塗りの前に生漆と米糊、そして焼成珪藻土（プランクトン類が沈積した海底土が隆起したもの）を混ぜたものを使い何層にも布を貼って増強していることなどの説明があった。

朝市が開かれる商店街の一角にある桐本木工所の販売店に移動して完成品を見学。品物を購入した人も多く、売り上げに貢献したのではと思う。



社長夫人が紙芝居を使って工程の説明



社長夫人



お店で輪島漆器を購入

近くの料理店「やぶ新橋店」で海鮮丼の昼食。食事後、バスに乗車、能登半島にお別れして金沢駅に向けて出発 金沢駅前のバス専用ロータリーに到着し、3日間お世話していただいた中村先生ともお別れ。16時発のサンダーバードに乗車するまでの半時間ほどお土産購入タイムで自由行動。16時、帰途についた。

<感想>

参加者は、金沢大学が能登で行う里山里海マイスター養成プロジェクトの活動の意義を充分に理解し、マイスターOBの若者たちの実際の活動状況に直に触れ、志高く頑張っている姿に熱い志を感じたことと思う。マイスターOBの4人の若者は地元育ちが2名、他所からの移入者が2名。全員が自分の関わる事業を通して能登の地域おこしに貢献すべく、4人の連繋しての活動がよくわかり、好ましく思えた。

能登は、照葉樹林の北限となる森は深い緑に覆われ、半島に抱かれた穏やかな海は多くの海の幸に恵まれている。狼煙灯台、須須神社、上時國家、白米千枚田等を始め観光資源も豊富にある。里山里海活動をベースにした地域おこしの素材はまだまだ多くあり、今後無限の可能性を秘めているように思われた。今後の発展を切に祈る。

以上